

令和6年度
成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業
長崎訪問報告書



成 田 市

成田市平和啓発推進協議会

<< 目 次 >>

事業概要	1
活動内容	3
長崎訪問	6
訪問後の活動	
報告会	15
派遣団員の報告	20
平和宣言	36
平和都市宣言（世界連邦平和都市宣言、非核平和都市宣言）	38
平和記念碑	39



○事業概要

【事業名】

成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業

【目的】

市では、昭和 33 年に「世界連邦平和都市」を宣言するとともに、戦後 50 年目を迎えた平成 7 年には、「非核平和都市」を宣言するなど、平和啓発活動を進めている。戦後 80 年近くが経過し、戦争を体験した方が年々少なくなる中、その貴重な体験を風化させることなく、次世代に引き継ぎ、平和の大切さを伝えていくことが課題となっていることから、市内の中学生が被爆地を訪問し、直接、戦争の恐ろしさや平和の尊さなどを学び、その感想や成果を多くの市民に伝えることで平和啓発を促進させるものである。

【訪問先】

原子爆弾の被爆地であり、原爆資料館のある長崎市・長崎市のうち、本年度は長崎市を訪問する。

【日程】

令和 6 年 8 月 7 日（水）～8 月 9 日（金）

【使節団の編成】

- (1) 団 員・・・市内の中学校・義務教育学校（11 校）から 1 名ずつ推薦された 11 名
- (2) 随行者・・・市教育委員会教育指導課職員 1 名、平和啓発推進協議会員 1 名、市文化国際課職員 1 名の合計 3 名

【実施経過】令和6年

5月10日(金)	各中学校・義務教育学校へ団員の推薦依頼
6月30日(日)	結団式・第1回事前研修
7月19日(金)	第2回事前研修
7月29日(月)	出発式、第3回事前研修
7月31日(水)	第4回事前研修
8月7日(水)～9日(金)	長崎市を訪問
8月19日(月)	事後研修、報告会
8月～11月	各学校での報告会

【使節団】

令和6年度成田市中学生折り鶴平和使節団の構成は次の通りです。

○ 中学生

学 校 名	学 年	氏 名	備 考
成田中学校	2年	森 好叶	
遠山中学校	2年	山中 星那	
久住中学校	2年	橋本 悠香	
西中学校	2年	山崎 結希乃	団長
中台中学校	2年	折笠 寧心	
吾妻中学校	2年	関口 遼人	
玉造中学校	2年	久保田 倫愉	
公津の杜中学校	2年	西嶋 美陽	副団長
下総みどり学園	8年	堀越 虎之介	
大栄みらい学園	8年	岩瀬 悠真	
成田高等学校附属中学校	2年	渡邊 あいり	

随員

成田市教育委員会教育指導課	稲葉 尚子
成田市文化国際課	大場 文
成田市平和啓発推進協議会	山崎 孝典

○活動内容

【成田市中学生折り鶴平和使節団結団式】

6月30日（日）、成田市中学生折り鶴平和使節団結団式を実施しました。



【事前研修】

原爆についての学習や被爆体験者のお話を通して、知識を深め、被爆地訪問に向けて準備しました。

第1回 6月30日（日） 事業の概要、原爆とは、被爆体験講話（木村 美子さん）



被爆者の木村さんのお話がとても印象に残りました。被爆当時是什么样的光景が広がっていたかやどのように感じたかなど、貴重なお話を聞けました。（アンケートより）



第2回 7月19日（金） 戦争と平和について考える、千羽鶴の標語作り、見学先調べ

班員と協力する機会が多かったので、かなり仲が深まったと思います。（アンケートより）

第3回 7月29日（月） 出発式リハーサル、見学先発表

第4回 7月31日(水) 平和朗読会・オンラインとうろう流しへの参加

感情がこもった朗読で、聞いていてすごく引き込まれた。原爆のことについて深く学べた。(アンケートより)

【千羽鶴収束作業】

市内11中学校の全生徒をはじめ市民から平和への祈りを込めて折られた鶴が寄せられ、成田市平和啓発推進協議会の方々を含むボランティアの手により、千羽鶴に収束されました。30,000羽が被爆地に届けられ、平成21年度以来、被爆地に献納した折り鶴は1,539,850羽になりました。

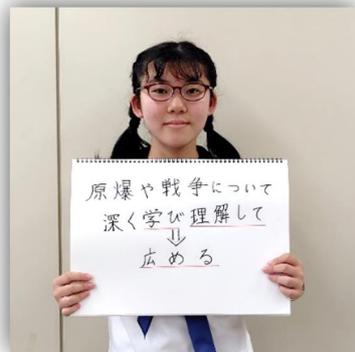
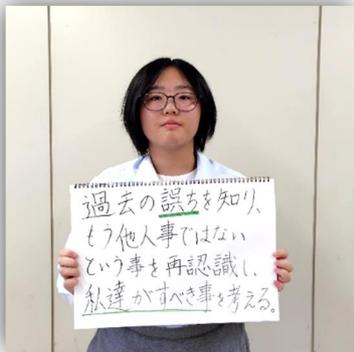


【折り鶴平和使節団・千羽鶴出発式】7月29日(月) 市民ロビー

市内中学校の生徒らが平和への祈りを込めて折った鶴がヤマト運輸株式会社の協力により被爆地である長崎と広島に送られました。また、各団員が、成田市長、成田市議会議長らの前で、長崎で学びたいことや体験したいことなどの抱負を述べました。



<長崎訪問に向けた抱負>



○長崎訪問

【行程】

- 8月7日 成田市役所 集合
(水) 羽田空港 発
長崎空港 着
昼食
ボランティアガイドの案内で被爆遺構等見学
(平和公園、山里小学校、永井隆記念館、如己堂)
救護所メモリアル見学
ホテル 着・夕食
ミーティング
- 8月8日 ホテル 発
(木) 平和公園で千羽鶴献納
ボランティアガイドの案内で被爆遺構等見学
(旧長崎医科大学、山王神社)
長崎原爆資料館見学
昼食
青少年ピースフォーラムに参加
(被爆体験講話聴講、被爆建造物等のフィールドワー
ク(原爆落下中心地、浦上天主堂)に参加、交流会・
夕食)
ホテル 着
ミーティング
- 8月9日
(金) ホテル 発
平和祈念式典に参列(平和公園・出島メッセ)
昼食
長崎空港 発
羽田空港 着
成田市役所 着・解散

8月7日(水)

6:30

成田市役所集合

市役所玄関前にて出発の挨拶を終えた後、バスで羽田空港に向け出発。

6:40~
11:20

成田市役所～羽田空港（ソラシドエア SNA33 便）～長崎空港



12:30~
14:10

昼食（和泉屋 長崎平和公園前店）



14:20~
16:10

2グループに分かれ、ボランティアガイドとともに被爆遺構を見学 平和公園見学



平和公園は世界恒久平和の願いを込めて作られ、有名な平和祈念像は長崎県出身の彫刻家である北村西望(せいぼう)氏によって作られたものです。平和祈念像の右手は原爆を示し、左手は平和を、顔は戦争犠牲者の冥福を祈るものです。

僕は平和の泉の噴水が羽ばたく鳩の翼を表していたり、タイルが熱線によ

って燃える長崎の街を表している」と知り、二度と核を使う、使わせることがあってはならないと強く感じました。(吾妻中学校 関口 遼人)

山里小学校見学



山里小学校は、熱線によって溶けたガラスなど、被爆当時の状況を感じ取れるものが数多くある場所でした。

私は、山里小学校の防空壕を見て、想像よりも暗く狭く、不気味な雰囲気を感じました。

また、平和案内人の方から、当時新しい壕を掘っていた先生がここで亡くなったことを聞き、防空壕やシェルターなどを必要としない平和な世の中の重要性を感じました。(中台中学校 折笠 寧心)

16:25～
17:10

永井隆記念館・如己堂見学



私は長崎市永井隆記念館そして如己堂で永井隆さんの生涯について学んできました。永井隆さんが実際に書いた「平和を」という文字には生前まで力強く平和の大切さについて伝え続けていた事がわかりました。

如己堂は写真よりも小さく感じました。小さな部屋で子供たちと一緒に過ごしていた如己堂は優しい温もりを感じました。(久住中学校 橋本 悠香)

17:20~
19:00

救護所メモリアル見学



救護所メモリアルでは、治療を受けた患者や、医師や看護師などの体験談をまとめたビデオを見ることができました。また、当時実際に使っていた医療機器も見ることができました。下調べの段階では知らなかった数多くの体験談を聞くことができ、より学びを深められたと思います。(成田中学校 森 好叶)

19:30~
20:00

バスで移動してホテル ニュータンダハ〜夕食（ホテル内レストラン）ミーティング

本日の反省と明日の折り鶴献納の準備を行いました。



20:50

出島散策



ホテル帰着

8月8日(木)

8:10

朝食後、路面電車で平和公園へ移動



8:50~

11:00

千羽鶴献納

成田市の中学校から集まった千羽鶴を献納後、2グループに分かれ、ボランティアガイドとともに山王神社、旧長崎医科大学を見学しました。



僕は、原爆落下中心地で、原爆がどれほどの被害を出したのかについて学びました。当時の地層では、粉々になった瓦や瓶が埋まっており、原爆がどれほど強力だったのかがよく伝わってきました。僕たちはここに折り鶴を納め、今を生きることができるという平和について深く考えられました。(遠山中学校 山中 星那)

山王神社見学



山王神社では原爆の熱風などを実際に受けた一本柱鳥居が79年間形を保ち続けていました。また鳥居は元の角度より原爆の爆風で12.5度ずれていま

した。さらに被爆後奇跡的に緑を戻した大楠も見られました。私はこのようなことを知って、原爆はこんなにも大きな建物さえ動かしてしまうんだなと思いました。(玉造中学校 久保田 倫愉)

旧長崎医科大学見学



長崎医科大学は中心地から約 500 メートルと言う至近距離で被爆したとされていて、大学の校舎は木造だったので、ほとんど何も残らなかったそうです。私はその中にある原爆医学資料展示室の被爆者と健康な人のレントゲン写真を比べて、たった 1 つの原爆によってこれだけの被害が出たことにとっても衝撃を受けました。(公津の杜中学校 西嶋 美陽)

11:00~
11:50

長崎原爆資料館見学

ボランティアガイドと分かれた後、資料館内を見学しました。



長崎原爆資料館は様々な原爆に関する資料を取り扱っている資料館でした。僕は資料館内の深刻な雰囲気印象に残りました。また、本などではイメージしづらい原爆投下直後の映像などで原爆に関する情報をよりリアルに学ぶことができました。(大栄みらい学園 岩瀬 悠真)

12:00~
12:50

昼食 (ホテル セントポール長崎内レストラン アザレア)

14：00～

15：15

青少年ピースフォーラム参加

開会式・被爆体験講話聴講

被爆体験者・松尾幸子さん：11歳の時、爆心地から1.3km離れた場所で被爆。



青少年ピースフォーラムでは、全国の平和使節団と、戦争と平和の尊さを学び、交流を深める深めることができました。

私達は実際に、松尾幸子さんの被爆体験を聞きましたが、そこで幸子さんは『お姉さんが自宅で亡くなっていたという話を聞いた時、もう悲しいという感情も浮かんでこなかった。』と述べられていました。私は、壮絶な被爆体験から「死」という恐怖心が薄れてしまうのだと思いました。

核による長期に渡る後遺症は誰にも治すことはできません。ですが、世界平和の為に『核兵器の怖さ』を訴え続ける事が今私達に出来る事だと考えました。(西中学校 山崎 結希乃)

15：30～

17：30

被爆建造物等のフィールドワーク（浦上天主堂、原爆落下中心地）



浦上天主堂は、カトリック信徒を中心に30年の歳月をかけて大正14年に完成し、当時は東洋一の大きさを誇っていました。

爆心地から約500mにあった浦上天主堂は、原爆投下後、一瞬にしてドームは崩れ落ち、わずかに赤煉瓦の堂壁のみ残して壊滅し、約15000人の信徒のうち約10000人が亡くなったと言われています。

実際に中に入ることはできませんでしたが、外にある被爆した聖人像や鐘楼ドームが落ちているのを見て、爆風や熱線の威力と原爆の悲惨さを改めて

感じることができました。(下総みどり学園 堀越 虎之介)

18:00~
19:30

交流会・夕食



20:20~
20:40

路面電車でホテル ニュータンダへ移動～ミーティング

路面電車でホテルに戻り、今日の反省と明日の最終日に向けた確認と意気込みの発表を行いました。



8月9日(金)

8:40

ホテル出発

8:30~

バスに乗車

8:50

10:30~

2グループに分かれ、平和祈念式典に参列(平和公園・出島メッセ)

12:00





平和祈念式典では、岸田総理をはじめとする多くの方々がたくさん集まり、原爆死没者を慰めると共に、世界平和を願うというとても厳かな式典です。

私は長崎市長の世界平和を訴える平和宣言に胸を打たれました。そして、黙祷の時にはこの瞬間、この時間であの残酷な原子爆弾が落ちたんだと思うと、鳥肌が立ち、もう二度とこの悲惨な事実を起こさない、起こしてはいけなと強く思いました。(成田高等学校附属中学校 渡邊 あいり)

12：30～

13：00

15：35～

20：10

昼食 (ホテル セントポール長崎内レストラン アザレア)

長崎空港 (ソラシドエア 36 便) ～羽田空港～成田市役所

20：25

成田市役所 着・解散



【事後研修】

事後研修では、各団員が長崎訪問中に「見て、触れて、感じた」ことをまとめ、平和の尊さを伝える「長崎訪問報告会」に向けた準備に取り組みました。

8月19日（月） 報告会準備、アンケート



○報告会

【長崎訪問報告会】8月19日（月）庁議室

報告会では、3日間の訪問で「見て、触れて、感じた」ことと、その体験を今後どのように生かしていきたいかを発表しました。最後に、教育長から講評をいただきました。



<長崎で感じた「自分の思い」～私にとっての平和・私にできること～>



私は折り鶴平和使節団として長崎に訪問し、原子爆弾の恐ろしさや平和の尊さを見て聞いて肌で感じてきました。この貴重な経験を通して私は折り鶴

平和使節団の一員、ましてや世界で唯一の被爆国に生まれた一人の日本人として責任をもって多くの人に原子爆弾の恐ろしさや、平和の尊さを伝えていきたいです。



僕が平和のために今できることは、戦争の悲惨さや平和の大切さを広く伝えるということです。僕は長崎に行って、戦争について平和についてなどいろいろなことを学びました

それを聞いて学んだだけに留めずに、より多くの人に知ってもらい安心して過ごすことができている今がどれほど幸せなことかを知ってほしいです。



79年前の日本は今との平和の日本とは違い悲惨な時代でした。長崎に行ってその悲惨さ、恐ろしさを体で感じることができました。そのことを様々な

人に知ってもらえるように、まずは学校の人たちにわかりやすく伝え来年以降の使節団を希望する人たちが増えるように私が感じたことを伝えていきたいです。



私が平和のためにできることは、唯一の被爆国である日本。そこに住んでいる日本人として、核爆弾と戦争の恐ろしさを訴え続けていくということです。

世界は自分たちの国の権利を保持するため、また他国への威嚇をするために核を保有し続けていると思います。

そのことを知らないふりをしてしまうのは違います。唯一の被爆国の日本だからこそ核を保有すべきではないと訴え続けていかなければならないと私は考えたからです。



私にできることは、長崎で体験したことを家族や友達などの身近な人に伝えることです。

私は平和祈念式典で、被爆者の方の声を聴き、この声

を平和な世の中になるよう、世界へ発信していかなければならないと思いました。そのためにまずは身近な人に伝えていきます。



僕が平和のためにできることは、如己愛人の精神をより多くの人に伝えることです。

如己愛人は被爆者であるながいたかしさんが大切にしていた言葉で聖書の中のことば、「己のごとく

人を愛せ」という意味です。僕が初めてこの言葉を知った時、これこそが世界から戦争をなくす鍵となるのではないかと思いました。世界中の人が仲良しに認め合えば戦争をなくすことができるはずです。まずは、地域、学校の人にこの言葉を伝え、より多くの人に戦争、核の知識を伝えるとともに如己愛人の精神を知ってもらい、平和な日本や世界を築くきっかけになりたいと思います。



私が平和のためにできることは、原爆、戦争への意識を一人でも多く強めるです。

私はこの折り鶴平和使節団に入る前は平和や戦争について全く知識がなく、目を向けようともしませんでした。ですが、事前研修や、長崎での三日間でたくさん聞いたり見たりしてたくさん知識を得て平和と戦争ということに意識が強まりました。

なので、私のように今まで意識をしてなかった人たちにも、もっと知りたいという思いが出る様に一人でも意識が強まるように伝えていきたいと思います。



私が平和のためにできることは、過去の過ちを決して忘れないことです。

私は世の中の人々は、自分たちは生まれていないから関係ないと心のどこかで思っているのかもしれないと感じます。

過去の過ちを二度と繰り返さないために、過去の過ちを決して忘れず人々に伝え続け平和な未来を創っていきたいです。



1945年、長崎県に原爆が投下されてから79年となりました。長崎はとてもしかな町になっていますが、原爆が落とされたことには変わりありません。私

ちにできることは、それを一人一人が理解して、伝えること。そのために僕は、戦争や原爆について深く学びたいと思いました。



平和のために僕ができることは、身近な人から様々な人へ原爆廃絶の意思を伝えるということです。身近な人は自分の家族や親族、様々な人は学校の報告会など

で原爆廃絶の意思を伝えていきたいです。



平和のために私ができることは、学んだことを伝え続け平和の輪を広める、です。

事前研修を含め折り鶴平和使節団として、目で見て肌で感じるとても刺

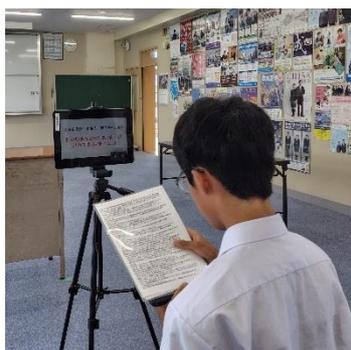
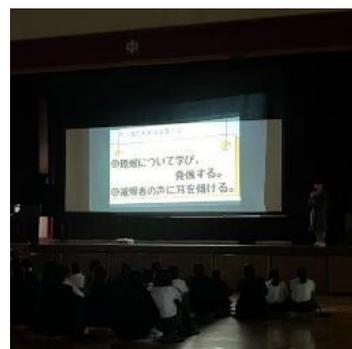
激的で貴重な経験をし、原爆の恐ろしさや、平和の尊さなどいろいろなことを学びました。ここで学んだことをたくさんの人に伝え続け、世界中の人が穏やかに暮らせるように平和の輪を広めていきたいです。



【学校報告会】

派遣団員となった生徒たちは、それぞれの中学校において、被爆地を訪問して学んだことを自分の言葉で先生や他の生徒たちへ報告しました。

成田中学校	11月18日(月)
遠山中学校	10月11日(金)
久住中学校	10月25日(金)
西中学校	10月15日(火)
中台中学校	11月15日(金)
吾妻中学校	9月2日(月)
玉造中学校	10月30日(水)
公津の杜中学校	9月12日(木)
下総みどり学園	11月9日(土)
大栄みらい学園	10月21日(月)
成田高等学校附属中学校	8月28日(水)



【派遣団員の報告】

広島派遣を終えた後、派遣を通して感じた事や平和への思いが派遣中学生それぞれの言葉で綴られています。

私たちにできること

成田中学校 2年 森 好叶

今から79年前の1945年8月9日午前11時2分、広島につぎ世界で二番目に長崎に原子爆弾が投下され、上空500mで爆発しました。そして7万3884人の尊い命と、長崎の街を一瞬にして壊しました。私は成田市中学生折り鶴平和使節団の一員として三日間長崎を訪問し、原爆がもたらした被害の恐ろしさや平和の尊さを肌で感じてきました。

皆さんは原子爆弾についてどのくらい知っているでしょうか。

原子爆弾は現在世界で1万2121保有されている核兵器の一種です。原爆は三つのエネルギーからできています。1つ目は爆風です。爆風は長崎に投下された「ファットマン」という原爆の全体のエネルギーの50%を締め、最大風速は秒速440mにも達し、押し潰された建物の下敷きになってたくさんの方が亡くなりました。2つ目はファットマンの全体のエネルギーの35%を締める熱線です。原爆が爆発したときの原爆落下中心地周辺の地表面の温度はおよそ3000℃から4000℃の高温となり、熱線を浴びた人々の皮膚は焼けただれて剥がれ落ち、爆心地周辺の建物はすべて焼き尽くしてしまいました。3つ目は「ファットマン」の全体のエネルギーの15%を締める放射線です。放射線は普通の爆弾とは違って原子爆弾にしか含まれず、目には見えません。しかし、放射線を浴びると体内のさまざまな細胞を傷つけ、病気を引き起こしてしまいます。放射線によって引き起こされた病気で今もなお苦しんでいる被爆者もいます。

私は三日間の長崎訪問の中で印象に残った見学先が二つあります。1つ目は、救護所メモリアルです。救護所メモリアルは元々新興善小学校という国民学校でした。しかし原爆投下後、校舎は倒壊を免れたことから、救護所になりました。救護所メモリアルには明日をもしれぬ放射線の被害にさらされながら患者の治療にあたった看護師や医者体験談が残されていました。私はその体験談を聞きながら当時の状況、医者や看護師の気持ちを想像したとき耳を塞いでしまいたくなるほど痛ましく思えました。2つ目は原爆資料館です。原爆資料館館内には当時の惨状を物語るボロボロになった衣服や建物などが展示されていました。中でも印象に残っている展示があります。それは黒く焦げた母親の遺骨の傍に遠くを見つめてたちすくむ子の写真です。私は自分がこの写真に写っている子だったらどんな思いだったろうかと想像しただけで胸がギュッと締め付けられるような辛い気持ちになりました。

私はこの三日間の訪問を通して、核兵器廃絶が世界に広まっていないことに危機を感じ

ると同時に、伝えることの責任を感じました。それは、現在被爆者の平均年齢が85歳となり、原爆の恐ろしさや平和の尊さを伝えるのが難しくなっているからです。また、世界に目を向けてみると、主にウクライナ侵攻や中東での紛争が激化してきています。これは、世界のどこかで再び核兵器が使われるかもしれないということです。

私たちは世界で唯一の被爆国に生まれ、再び核兵器が使われる可能性が高まっている今、何をすべきなのでしょう。また、何ができるのでしょうか。私は原爆や戦争の恐ろしさや平和の尊さを知って多くの人に伝えていくことが大切だと思います。今、私たちは平和な日常を送ることができています。しかし、過去に原子爆弾が落とされ多くの人が命を落とし、苦しんできました。そして今、世界では戦争や紛争で多くの人が苦しんでいます。私たちの平和もいつ壊されるのかわからないのです。だからこそ今、戦争の悲惨さと平和の尊さを世代や国籍を超えて伝えていくことが平和への一歩になるのだと思います。

今の自分たちにできること

遠山中学校 2年 山中 星那

1945年8月9日午前11時2分、アメリカ軍が広島に続いて日本で二発目の原爆を長崎に向けて落としました。そのたった一発の原子爆弾で約70,000人の人々が亡くなりました。今もなお、世界各国で戦争や紛争が起きています。悲惨な過去から目をそむけずに、戦後80年近くを過ぎて被爆者の方々が少なくなっても次世代へ戦争の恐ろしさや平和の尊さを伝えていくために、今回僕たちは平和使節団として長崎を訪問しました。

1日目はまず、平和公園に行きました。入ってすぐにある平和の泉は、水を求めて亡くなっていった方々の冥福を祈るために作られました。また、地面の赤い模様は焼けてしまった長崎の街を、噴水の形は平和の象徴である鳩が羽ばたく時をイメージして作られました。このように、細かいところに人々の想いが込められています。また、平和公園内には17のモニュメントがあります。これらは世界各国から送られてきて、そのモニュメント達の多くが「女性と子どもが幸せに暮らすことができる」がテーマとなっています。この中で印象に残ったものは「地球星座」というモニュメントです。これはアメリカ合衆国から送られてきたもので、7つの大陸を表す7人の人間で世界の平和と連携を表しています。僕はこのモニュメントから全世界手を繋いで平和に暮らしましょうということが伝わってきました。

2日目の原爆資料館では、二つのものが印象に残りました。一つ目は、溶けて繋がってしまった6本のビンです。これは原爆の熱線によって溶かされてしまいました。二つ目は、11時2分で動かなくなってしまった時計です。この時計は、原爆落下前までは動いていましたが、落下した時刻11時2分で止まってしまいました。これらから僕は、楽しく過ごしていた時間も何もかもがたった一発の原子爆弾で壊されてしまい、とても憎く感じました。山王

神社では最初に二の鳥居を見ました。これは、鳥居の片方の柱が爆風によって壊されてしまったというものです。これは爆風の当たり方の違いで奇跡的に片方だけ残ったそうです。また、神社内にあったクスノキは被爆したにも関わらず生き延び、原爆の悲惨さと平和のありがたさを語りかけてくれました。また、当時は人々に生きる気力や勇気を与えてくれたと知ることができました。その次に、原爆落下中心地に向かいました。ここには、被爆者の方々の名前が奉安されていて、僕たちはここに折り鶴を奉納しました。そして、この場所には原爆落下当時の地層がそのまま残されており、爆風によってこなごなになってしまった瓦などが大量に埋まっていました。この光景から原爆がどれほど威力が高かったのかが改めて伝わってきました。

3日目は平和祈念式典に参加しました。式典には、内閣総理大臣をはじめ、各国の代表の方々など、大勢の人が参加していました。僕は、出島メッセから平和公園の中継映像を見ながら参加しました。この式典で印象に残ったことは黙とうです。平和の鐘が鳴ると共に原爆が落ちた11時02分に黙とうしました。79年前の今日、原爆が落ちてしまい、一瞬にして何万人もの命が失われてしまったと考えると、胸が熱くなり、当時の悲惨な光景が頭に浮かびました。それと同時に、被爆者の方々の冥福と、自分が代表としてこの出来事を次世代へと語り継いでいかなければならない、という使命感が湧いてきました。

3日間いろいろなところに行き、たくさん歩きました。たくさん歩いたということは、それだけ原爆の被害の範囲は大きかったということです。広島、そして、長崎が最初で最後の原爆被爆国となるようにしなければいけません。

「一人ひとりの力は微力だけど無力ではありません。」

この言葉のように、一人で解決しようとせずに、世界中のみんなが協力すれば、戦争を止められるかもしれません。そのために僕は、まずは原爆が落とされてしまったという「過去」を途切れさせずにいろいろな人に知ってもらうために「未来」へ語り継いでいきたいです。



命のたくましさ

久住中学校 2年 橋本 悠香

2024年8月9日私は今長崎にいる。79年前私がいる場所に原爆が落とされた。たった3秒間で7万4000人が死亡7万5000人も負傷者がでた。長崎県は自然豊かで素敵な所だった。そして私が長崎県に行けた事は奇跡に近かった。長崎訪問は人気が凄かったその中から選ばれた事を感謝し長崎訪問に臨んだ。

1日目で印象的だったのが2つある。1つ目は山里小学校だ。衝撃的だったのは今もなお、小学校として使われている事だ。てっきり資料館になっていると思っていた。山里小学校は原爆落下中心地からとても近く大きな被害がでた。爆風で屋上まで穴が開いたり、窓の額が変形していたり、そして日にちが経つとグラウンドは火葬場になった。児童たちは自分の家族であろうとなかろうと火をつけて死体を燃やした。今もまだ山里小学校のグラウンドの下には人骨が埋まっているかもしれない。

2つ目は救護所メモリアルだ。救護所メモリアルは被爆した人々の応急処置を受ける元々学校だった施設だ。けれど、救護所メモリアルではまともな処置は行えなかった。医者・看護師が少ない中、運ばれてくる被爆者は大勢。そして、原爆で物資の数はとても少なくなっていた。当時、治療としてまず輸血が1番だったが、輸血の処置を施しても貧血がひどく、衰弱が激しいため生の牛の肝を食べさせた。原爆には毒があると言われていたため柿の葉を煎じたものを飲ませたり、うどん丼一杯の酢を飲ませた。かぼちゃの腐った物を傷につけたりしていた。消毒液が足りず、海水を汲んできて、ドラム缶で沸騰させた海水を消毒液の代わりに使用していた。沢山の被爆者が水を求め港に流れ込む川に入った。当時は放射能の知識がなく、海水は放射線で汚染されていた事を知らずに使用していた事実を時間を経て知る。現代では信じられない事かもしれないが、もし放射線という知識が少しでもあれば救えた命があったかもしれない。正直気持ちが悪いと感じる人もいると思うが、

私は日本の過去から目を逸らしたくないと感じた。

2日目は色々な所を見学した。その中で1番印象に残ったのは長崎医科大学だ。長崎医科大学は永井隆さんの出身大学でもある。今の長崎大学病院はとても綺麗だった。けれど79年前の長崎医科大学は原爆中心地から500mという近い位置にあり、門の左の石の柱は斜めに傾き黒くなっていた。そして、唯一建物として残っているのが旧配電室、現ゲストハウスだ。今は長崎大学病院に通う留学生たちに貸し出しているゲストハウスだが昔は配電室として使われていた。ゲストハウスも黒くなっていたが当時、建物に隠れており、周りが木に覆われていたので形が残っていると考えられる。

3日目は平和祈念式典に参列した。式典には様々な大臣や岸田内閣総理大臣など代表の方が大勢参列し、それぞれの平和の想いが伝わってきた。その中で被爆者代表、三瀬清一郎さんが岸田内閣総理大臣に向けて

「子供や孫たちが安心して過ごせる青い地球を遺して行くために、被爆国日本こそが、核廃

絶を世界中の最重要課題として真摯に向き合うことを願ってやみません。」

と、話していた。私はかっこいいと思った。大勢の人々の前で代表として想いを伝えることは、簡単な事ではない。とても勇気がいる事だと思った。清一郎さんの姿を見て平和の大切さ、生き抜くためのたくましさをもっと多くの人に伝えていこうと思った。

私1人が何か大きな事を変えるのは大変だし無理かもしれない。けれど、私が1人でも多くの人に平和の大切さを伝え、平和について1人でも多くの人に関心を持ち、相手が知ろうとしてくれるのであれば、きっと世界は変わると信じて、私は伝え続けたいと思う。

唯一の被爆国

成田市立西中学校 2年 山崎 結希乃

今から79年前の1945年8月9日、長崎の松山町という場所に、1つの核爆弾が投下されました。その使用された核の名前は『ファットマン』と言い、73,884人の人々の命が失われました。

私達は、戦争の恐ろしさや平和の尊さを学ぶため、平和使節団として長崎へ訪問しました。

1つ目は青少年ピースフォーラムです。時間は約1時間と短かったですが、私達は松尾幸子さんの被爆体験講話を聞きました。幸子さんは爆心地から600mに位置する山里小学校の生徒であり、当時11歳の5年生でした。8月9日の朝、1番上の姉と叔母を置いて、祖母や母、弟達と山へ登り食糧を調達していたところ被爆しました。唯一の記憶としては、ピカッと光が空に広がっていた事と、ドンツという爆音と共に暫く気を失っていたことです。気がつくやうに、青々としていた近くの畑は、まるで運動場のように土だけになってしまっていました。祖母は『世界は終わった』と呟いていたそうです。午後3時頃、警防団の詰めどころに出かけていた父が杖をつきながら、幸子さん達の元に辿り着きました。父は助かりましたが、近くにあった大量のガスが漏れ、吸ってしまったから体調が悪いと思っていました。けれど後から放射線のせいだったという事を知りました。夕方、幸子さんの自宅付近に住んでいた、いとこ2人から姉や兄嫁の死を聞かされました。しかし、幸子さんは生きる事で精一杯だったため、自分以外の人の死を悲しんでいられる余裕が無かったと語っていたのが、凄く心に刺さりました。『同じ人間という生き物なのに、どうして互いに苦しめあってしまうのだろう』と。幸子さんの父は下痢、熱などに襲われ8月28日、息を引き取られたそうです。そこで幸子さんは『あれだけ苦しんでいたのに、最期はあつげなく死んでしまうものなのか』と、原子爆弾が落ちてから初めて悲しいという感情が出てきたのでした。

2つ目は平和祈念式典です。私は平和公園ではなく、出島メッセでの参加でした。そこでは、開式が始まる前にハンドベルの演奏、朗読、そして世界の人々の『戦争』に対する想いと『平和』への願いを述べている映像が流れました。その中でも私は『KUSUNOKI プロジェ

クト』が印象的でした。これは福山雅治さんが考えたプロジェクトであり、原子爆弾の爆風や熱線を耐え抜き、今も生き続ける 50 本の『被爆樹木』と呼ばれる木々が映し出されました。映像越しでしたが、私はこの木々を見て、被爆によって亡くなられた方々の『もっと生きたかった』という想いを表しているように感じました。それは、長崎に訪問して 2 日目に見た山王神社のクスノキは太く、枝の 1 本 1 本が丈夫に見えたからです。私は命を大切にするという面でも、植物に関心を持ち、この『被爆樹木』が生き続けるように、支えていきたいと思いました。長崎平和宣言では長崎市長が、23 歳で被爆した詩人・福田須磨子さんの

『原爆を作る人々よ！

今こそ ためらうことなく

手の中にある一切を放棄するのだ

そこに初めて 真の平和が生まれ

人間は人間として蘇ることが出来るのだ』

という詩を引用していました。まるで実験をするかのように核を落とされた日本。世界で唯一の被爆国である日本。だからこそ私達日本人として、この 79 年間平和を訴え続けてきたわけですが、今だに戦争が絶えず、常に核の脅威にさらされています。それは何故なのだろうかという素朴な疑問が頭をよぎりました。そこには各国の政治的な思惑、宗教、人種問題などを背景に、核を持つ事で権力を見せ続けるため、1 度手に入れた核を手放せないのだろうと感じました。ただそれを『仕方がない』と諦めてしまうのは違います。

唯一の被爆国である日本に住む日本人だからこそ、無くしてはならない戦争への恐怖心や、平和を守ろうとする姿勢。これは時代が移り変わっても、絶対に失ってはならない信念だと私は思っています。

今を生きる私の使命

中台中学校 2 年 折笠 寧心

私は、成田市折り鶴平和使節団の団員として 4 回の研修を経て、「原爆の恐ろしさを体感する」という抱負を抱き、3 日間長崎へ訪問しました。研修では、原爆について考え意見を交換したり、被爆体験者の講話を聞いたり、平和朗読会に参加したりと、原爆、戦争、平和についての知識を広げました。長崎では、数々の被爆遺構を見学したり、式典に参列したりと、貴重な体験をしました。

1 日目。

まず、平和公園を見学しました。石段を上ると、水を求め亡くなっていった人々のためにつくられた平和の泉がありました。正面の石には山口幸子さんの手記「のどが乾いてたまりませんでした」と刻まれており、当時の惨状があらわに浮かんできました。

次に、山里小学校を見学しました。爆心地から約 600m にあるこの学校には、防空壕が残されており、防空壕を必要としない平和な世の中の重要性を感じました。

次に、永井隆記念館と如己堂を見学しました。記念館には、隆の自筆の原稿や書画、遺品などが展示されていました。如己堂は二畳ひと間で、隆が亡くなるまで 17 冊の本を書き上げ過ごした場所で、冷房や暖房がありませんでした。私は、冷房をつければ涼しくなり、暖房をつければ暖くなる当たり前の日常の有り難みを感じました。

1 日目の最後、救護所メモリアルを見学しました。ここは、原爆で怪我を負った人々が治療を受けた救護所の様子を再現した場所でした。当時小学校だったこの場所が突然救護所に変容した際、生徒はどう思ったのかを考えさせられました。

2 日目。

まず、山王神社を見学しました。神社の二の鳥居は、右半分が一本柱の状態で、12.5 度曲って柱に刻まれた名前が消えて残っていました。私は、原爆の爆風と熱線の破壊力を計り知ることができました。

次に、長崎医科大学を見学しました。当時木造建築であったため、原爆の炸裂と同時に倒壊して火災が発生し、焼け跡からは学生が座席についたままの姿で発見されたそうです。私は、安心して勉強できる環境の大切さを痛感しました。

次に、長崎原爆資料館を見学しました。館内には炭化した米飯が入った弁当箱が展示されており、原爆の熱線でこれだけ黒焦げになるのかと動揺を隠せませんでした。

次に、青少年ピースフォーラムで被爆体験者の講話を聞きしました。私は、講話の中での「浴びた放射線の影響を子孫に与えていないか不安」という言葉が耳に残っています。原爆は被爆直後だけでなく、生涯にわたり被爆者を苦しめていることがわかりました。

2 日目の最後、被爆遺構を巡るフィールドワークに参加しました。浦上天主堂には、被爆した像がそのまま残されており被爆の事実を物語っていました。当時の原爆落下中心地の温度は、3000° ~4000° だったそうで、原爆の威力を感じました。

3 日目。

私は、平和祈念式典に参列しました。''peace is a world heritage shared by all humankind (平和は人類共有の世界遺産である)'' 私は、被爆者代表の方のこの言葉を聞き、平和は価値あるものだと思い知り、平和な世の中にしたしたいと思います。

長崎訪問を通して、原爆の恐ろしさ、戦争の愚かさ、平和の尊さを体感することができ、長崎を最後の被爆地にするためにはどうしたら良いのか考えました。私は、''唯一の被爆国'' 日本で生きている私達一人一人が原爆について学び、核廃絶に努め、世界へ発信していかなければならないと思います。そのためには、私が長崎で体験したことを家族や友達などの身近な人に伝えることが大切だと思います。そして、被爆を体験した方の声に耳を傾け、その声を平和な世の中になるよう、未来へ繋げていきたいです。

知ることが未来につながる

吾妻中学校 2年 関口 遼人

爛れた皮膚や人や牛などの死体、あたりに広がる瓦礫の山・・・昨日まであった町が一瞬にしてなくなった写真を目にしたら、皆さんはどう思いますか。僕はそれらの光景が地獄のように感じられました。

僕は今回、平和使節団として長崎を訪問したことで原爆は「絶対にあってはならないもの、使ってはいけないもの」という学校で学んで得た「意識」が「実感」へと変わりました。僕は冒頭で述べたような写真を目にしたとき、原爆に関するどんなデータや数値よりも強く、深く、重く、胸に刺さるような思いを抱きました。そこから現地で直接見たり、聞いたり、自分のこととして捉えることがいかに大切かを改めて感じました。

長崎に行って特に印象に残ったことは2つあります。

1つ目は、如己堂や永井隆記念館で見た永井隆さんの人生です。永井隆さんは長崎市名誉市民第1号で、原爆投下後には救護活動を行っていました。永井さんはカトリックの信者で、聖書中の言葉「己の如く人を愛せ」からとった「如己愛人」という言葉を大切にしていました。僕が初めてこの言葉を知ったとき、これこそが戦争を終わらせる鍵となるのではないかと思いました。誰もが他人を愛し、愛されれば自分の意見を武力をもって貫くこともなく、対話によって問題を解決することができるでしょう。そのためにも多くの人に「如己愛人」の言葉と精神を知ってもらう必要があると僕は思います。そして、これから地域や学校の人たちに戦争や原爆の恐ろしさについて伝えるとともに「如己愛人」についても伝えていけるようにしたいです。

2つ目は、原爆犠牲者の名簿についてです。原爆犠牲者名簿は2箇所にも納められています。1箇所目の爆心地公園には原爆落下中心地碑があります。この巨大な柱の下にマイクロフィルム化された原爆犠牲者名簿が納められており、毎年原爆が投下された8月9日に更新されます。2箇所目の国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館には手書きの名簿200冊近くが納められています。この大量の名簿の中には、1冊だけ何も書かれていないものがあります。その名簿は一家全滅によって届けを出すことができなかった人たちのために用意されたものです。その一家が全滅した人たちはこれから先、名が残っていないがためにこの世から完全に消えてしまうのです。

原爆から得るものは勝利ではなく怒りや苦しみ、滅びであるということを知った人には1日も早く気づいてほしいと思いました。そのためにも日本国内だけで戦争について語り継ぐのではなく、海外にも戦争について語っていく必要があるのではないかと思います。しかし、被爆者の平均年齢は85歳となり、経験を伝えていくのには限界があります。だからこそ、僕たちが学び、新たな世代へと伝えていかなければならないと改めて感じました。

長崎への派遣を通して、原爆とは人から全てを奪う「負の兵器」であると感じました。長崎のガイドの方は「アメリカとロシアが持っている核兵器を全て使ったら地球は10回滅びる」と話してくださいました。世界各地で戦争が起こっている今、いつ再び核兵器が使用さ

れてもおかしくありません。そこで知識が生かされてくると思います。戦争・核について学び、それを正しく恐れ、平和のありがたみを知ることが二度と悲劇を起こさないことにつながるはずです。

戦争や核は災害と同じように年齢や人を選びません。原爆は僕たちと同じ中学生やさらに幼い命も一瞬にして奪いました。しかし、戦争・核と災害には違うところがあります。災害は防ぐことができませんが、戦争は僕たち人間自身の手で止めることができます。

平和祈念式典で長崎市長が伝えてくださったこと「私たちは微力だが無力ではない」平和使節団として長崎で学んだことをできるだけ多くの人に伝え、平和な日本を、そして世界を築くきっかけになりたいと思います。

自分ごと

玉造中学校 2年 久保田 倫愉

皆さんは、原子爆弾・原爆が人々をどれだけ絶望へ陥れたかご存知ですか？長崎に落とされた原爆の名前は、「ファットマン」。その恐ろしい核兵器を持ってきたのが「B29」という戦略爆撃機です。このたった一つの原爆で、現在に至るまで約19万人もの人々の尊い命がなくなりました。私はこの折鶴平和使節団に入る前まではこのような悲劇は全く意識していませんでした。そして長崎への三日間の訪問で、私の原爆への意識は以前よりさらに強まったと感じました。私はこの三日間で印象に残ったものがたくさんありました。

1日目では、平和公園と山里小学校が印象に残りました。平和公園では主に、平和の泉、平和祈念像が見られました。平和の泉の正面には、

「のどが乾いてたまりませんでした

水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました

どうしても水が欲しくて

とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

被爆後にできた、一面に油のようなものが浮いて見るからに危険なことがわかる川の水を喉が渇いてたまらなく、飲んだある少女の手記の一部が彫ってある石がありました。平和祈念像は原爆投下後様々な国や小学校に募金を求め、結果現在の価格で言うと約3億円集まりつくられたそうです。ポーズには平和への思いが込められており、右手には原爆の脅威、左手には世界平和、目を瞑っているのは犠牲者への冥福の祈りだそうです。これらを知って、私は平和公園はたくさんの人々の思いが込められており、「原爆」と「平和」の違いをモニュメントなどに例えて表現しているのだなと感じました。また、山里小学校では防空壕を見ることができました。戦争当時の山里小学校内には約20の防空壕がありましたが、現在では原爆や危険性の面からどんどん減り端にある三つの防空壕が残っています。三つの防空壕は女性や高齢者が掘っていたため、少し小さめでした。原爆投下のあの日、三つの入り口

のうち真ん中の入り口を11人の先生がたが掘っている途中でした。避難してきた近隣住民の方たちなどがこの壕の内外で亡くなっています。一方で、防空壕のおかげで助かったという人もいます。そのため、三つの防空壕は町の人々の大切なものとなっています。この話を聞いて、たくさんの人たちが亡くなってしまったけれど、防空壕を掘ってくれた人たちの努力で生き残ることができた人々がいてよかったなと思いました。

2日目は、山王神社と長崎原爆資料館が印象に残りました。山王神社では一本柱鳥居と大楠が見られました。一本鳥居は原爆の爆風を受けて鳥居の半分が倒れて、残った片方の部分も引っ張られ12.5度ずれてしまいました。大楠は原爆の熱線で黒焦げになり、「このままだと草木が一本も生えないので、引っ越してください」と言われるほど危機的な状況に陥ってしまいましたが、二年後奇跡的に芽生え緑を取り戻しました。この奇跡を見た人々は、勇気をもらったそうです。これらを知って、大きな鳥居を吹き飛ばすくらいの威力がある原爆の恐ろしさを改めて感じることができました。また、どんなに過酷な状況でも生きようとする粘り強い信念があれば、動植物は奇跡を起こせるかもしれないと思いました。長崎原爆資料館では、ファットマンの模型が見られました。ファットマンは日本語で言うと「太っちょ」。長さ3.25m、直径1.52m、重さ4.5tと記されていました。なかなか想像しづらいですが、約150cmの人が二人いて、肩車をしているほど巨大でした。これが長崎の地上で爆発し、一瞬にしてそこにあったはずの当たり前の生活を初めから無かったかのように消し飛ばしたと思うと、核兵器に対する憎悪と恐怖が込み上げてきました。他にも資料館には壁に残ったハシゴと人の影、硬貨が一瞬で溶けくっついて固まった大きな塊、ぐにゃりと曲がった日用品、正常な形をしていない手の骨とガラス、三日月のように異常な形になったサイダーびん、25年間生き残った母親が形見として持っていた幼児の服、自分で体を柔らかくしたかのように凹んでいるアルミニウムの鍋などがありました。これらは全て、原爆というたった一つの兵器によるものです。私は「一瞬」という言葉にゾッとしました。瞬きをする前とした後で同じ場所の景色がガラッと変わってしまうんだなと思うと、怖くてたまりませんでした。

3日目は、平和祈念式典に参加しました。特に私に深く突き刺さった言葉は、「自分ごと」。原爆について年代が違うから、場所が違うから、自分は関係ないから、という理由で多くの人は「他人ごと」と感じているのではないのでしょうか。その考え、改めて欲しいです。私たちが今平凡に住んでいられている日本という国の国民として、原爆はもう二度と造らない、造らせない、使わない、使わせない。そのような固い意志を一人一人が持っていければと思えた、貴重で素晴らしい経験ができました。

今、多くの人々は「平和」を「当たり前」と感じ、平凡に生きています。79年前の広島、長崎では、その当たり前の日常を原爆という人が造った兵器で、あっという間に消し去っていきました。被爆者の気持ちを全て知ることはできません。被爆者の見た光景を私たちが見ることはできません。亡くなってしまった被爆者方の声は聞くことができません。生き残った被爆者方の高齢化が進む今、私たちには何ができるのでしょうか。それは「知り、伝える」ことです。たとえ知る人が一人だとしても、伝えることでより多くの人に知ってもらえます。私は「知る」機会を与えてもらいました。次は「伝える」ことです。一人でも多く、原爆に

対する意識を強めていきたいなと思いました。最後に、長崎原爆資料館入り口に展示されていた文章。まずは、「知る」ことから。

「噴き上げる巨大なきのこ雲。
なにが起きたのか。
人びとはどうなってしまったのか。
雲の下の真実を知ってください。
—忘れないでください
—伝えてください。」

私なりの平和への誓い

公津の杜中学校 2年 西嶋 美陽

平和とは何か？それは、戦争のない、みんなが笑顔でいることができる世の中のことです。私はこの三日間で、戦争とは何か、平和とは何かについて考えることができました。特に心に残ったのは長崎原爆資料館です。2日目、長崎原爆資料館で

「噴き上げる巨大なきのこ雲。なにが起きたのか。人びとはどうなってしまったのか。雲の下の真実を知ってください。—忘れないでください—伝えてください」
という文が私たちを出迎えてくれました。

建物の中に入ったとき、私は改めて、これが生きた地獄のようなものだと感じました。同時に、大きな衝撃を受けました。体中にガラス片が突き刺さり、傷口は蛆虫が湧いていました。原爆による被害を受けた当時の人々は、死ねなかったのです。即死できなかったのです。当時の人々は、この世のものとは思えない苦しみを味わって、味わい尽くして、息を引き取ったのです。たったひとつの原爆のせいで、何もかも失った人が大勢いたのです。私は彼らのことを知った瞬間、胸が張り裂けそうになりました。今の何気ない日常が、どんなに素晴らしいか、生きていることが、どんなに幸せか、心の底から痛感しました。そして、こんな幸せを幸せと思えなかった過去の自分に、とても腹が立ちました。何気ない日常が、どんなに平和で素晴らしいものなのか、そしてそんな日常を一瞬にして奪った原子爆弾とは、どんなに恐ろしいものなのかと思い、怖いような、何だか冷たい気持ちになりました。そんな、たくさんの命を奪った核を持つてはいけないと言うことを、心から理解することができた瞬間でした。

そこで、いくつかの疑問が生まれました。なぜ人々は戦争するのでしょうか。なぜ核を保有するのでしょうか。人間が人間を殺すことのメリットはなんのでしょうか。私はたくさん考えましたが、納得する答えは見つかりませんでした。

「時を経ても、原爆で受けた傷は消える事は無い。」

ある被爆者の言葉です。後遺症等の問題、大切な人などを失ってしまって、心に負ってしまった傷…2つの意味に取れると思います。戦争や原爆は、いろいろな人の体や心に消えない傷をつけたのです。私はこれほどたくさんのものを奪った原子爆弾はもう二度と使うべきではないと思います。

そして3日目は、平和祈念式典に参列させていただきました。

会場には、水を求めて亡くなった当時の人々を想い、たくさんの水が供えられていました。長崎市長の挨拶によって始まり、長崎県に原爆が落とされた11時2分に黙とうを捧げました。79年前の8月9日、原爆が落とされたたくさんの人の命が一瞬にして奪われたのだと、当時の情景を想像してしまい、胸が苦しくなりました。79年前にいたような気持ちになり、もしも今が79年前だったら、と思うと、恐怖で体が震えるのを感じました。

私なりに考えた、「私たちにできる事は何か。」それは核兵器の恐ろしさを知り、未来へ伝えていくことです。「核兵器はもう二度と使ってはならない。」長崎を最後の被爆地にするために、私たち日本人は、世界で唯一原子爆弾落とされた国として、原子爆弾の恐ろしさを世界中に発信していかなければならないと思いました。先人たちが身を持って核兵器の恐ろしさを教えてくれたことに感謝し、もう二度と79年前の過ちを繰り返さないように、若者が中心となって、核兵器廃絶を訴えていく。これが戦争や原爆によって散っていった人々への弔いであると思います。

みんなが互いを認め合い、広い心を持って接することができれば、きっと平和な世界が訪れると思います。願うだけでは平和は訪れない。

「一人ひとりでは微力であっても、無力ではない。」

一人ひとりの勇気ある1歩が、やがては世界を変えると信じ、私はこれからも平和の大切さについてたくさんの人に訴えていきたいです。

平和のために自分達にできること

下総みどり学園 2年 堀越 虎之介

原子爆弾が落とされたあの日から79年という月日が経っています。今でもその原子爆弾に含まれている放射線に苦しんでいる人々がいるという事実があります。

原子爆弾とはとても恐ろしいものです。原子爆弾が炸裂して生き残った人がいたとしても、その原子爆弾から放出される放射線や、熱線などの影響で時間差で亡くなる人も少なくありません。たった一つの原子力爆弾によってどれほどの被害を受けたのでしょうか。建物は爆風で突き飛ばされ、熱線によって建物は焼け崩れ、人々は飛ばされてしまったり、飛んできたガラスが身体中に突き刺さったり、爆心地の地面の表面温度はおよそ3000℃～4000℃、熱線によって皮膚が焼きただれたりしました。1945年12月までに原子爆弾によって亡くなった人の数は73884人。負傷者は74909人とされています。奇跡的に怪

我はなかった人も放射線によって発症する白血病や原爆症に苦しみました。そして、放射線は遺伝子にも関係するそうです。一発の原子爆弾によって、多くの人々の尊い命が奪われ、生き残った人たちの希望まで奪い取ったのです。

現在、核兵器を保有している国はありますが、実際に核爆弾を使用している国はありません。このまま核を使われなくなれば、必ずと言ってもいいほど100年後には実際に被爆した人はいなくなると思います。それはいいことでもありますが、悪いことでもあります。いいこととして被爆した人がいないということは、核が使用されていないということなのです。使用されていないということは、人類や地球に被害はないということです。それに対して、100年後に被爆した人がいなくなるということは、核の恐怖、悲惨さ、そして平和な世界の大切さを体験している人がいないということです。体験をしていない人が戦争を語ることは、説得力が薄くなってしまいます。被爆者の方々の平均年齢は年々上がっています。

僕は、長崎へ行く前の研修で、成田市内の11校の代表の一人ひとりの意気込みや、希望した理由は様々ですが、原爆や戦争のこと、当時の世界情勢などについて学びたいという気持ちはみんな同じだと思いました。

実際に長崎へ行って事前の研修会や、調べたことよりも予想外だったことが多々ありました。それは、長崎はとてもきれいで良い場所だということです。79年前に原子爆弾が落とされた街とは思えないほどでした。しかし、79年前の8月9日に長崎に原子力爆弾が落とされたのは事実です。79年経った今でも、被爆した建物、被爆したクスノキ、原子爆弾が投下された時刻で止まっている時計……。観光地化が進み、マンションや、新幹線などが停車する駅も再開発されている中でも、被爆遺構を巡ることで、原子爆弾の脅威を感じることができました。復興には、かなりの時間を要したと思います。しかし、県民関係なく復興に携わり、努力した方々がいたからこそ、今の長崎があるのだと思います。

そして、長崎へ行って一番感じたことは、「一人の力は微力だけれど、無力ではない」ということです。長崎だけではなく、同じく原子爆弾を投下された広島も同じことが言えるのだと思います。無力にならないために今、僕ができることは、生存している被爆者の方々の話を聞き、語り継ぐことです。僕は長崎に行って感じたことやわかったことなど小さなことをまずは身近にいる家族や友人に語ったり、広めていきたいです。一人の力は微力でも、その一人が二人、三人・・・と増えていけば、大きな力に変わると思います。

原子爆弾を実際に体験し、被爆した人で現在、生きている人は少なくなってきました。原子爆弾や戦争の恐ろしさ、平和について語り継ぐという点で僕たち若い世代が、被爆した方々の声をしっかり受け止め、次の世代に継承していく必要があります。小さな努力が積み重なれば、少しずつでも世界は変わると思います。

普通や当たり前

大栄みらい学園 2年 岩瀬 悠真

僕は世界で2番目に原爆が投下された長崎県へ行き、約75000人もの方が死亡した原因の原子爆弾、通称「原爆」について折鶴平和使節団として3日間、目で見て、肌で感じ、考えてきました。

1日目、長崎に到着し、僕は長崎県の街並みに目を疑いました。原爆投下から79年。事前学習などを通して見た原爆投下直後の殺風景の写真から、79年かけて草木が生い茂り、長崎県民の笑顔がそこにはありました。ここまで長崎県を復興させた人々の強さを着いてすぐに感じさせられました。次に平和公園へ行きました。平和公園にある17個のモニュメント一つ一つにたくさんの想いが寄せられていて人々の決意が感じ取れました。次に山里小学校や永井隆記念館、如己堂、救護所メモリアルでは、実物の防空壕やその内部、永井隆さんの書いた本、戦時中のリアルな医療状況の動画などがありましたが、1番印象に残っていることは、永井隆さんが残した言葉「如己」の意味です。如己とは「己の如く人を愛せよ」多数の死傷者を出した爆心地近くの浦上地区の人々の心を忘れず、自分もその愛に生きようという意味だったのです。この言葉に強く胸を打たれ、この言葉の意味を忘れずに未来へ繋いでいこうと思いました。

2日目は原爆落下中心地に千羽鶴を献納しました。原爆落下中心地の空を見ると青くどこまでも広い空が広がっており、この真上から原子爆弾が落とされたとは考えられませんでしたが、でも実際は、79年前の8月9日11時2分に原爆落下中心地碑の真上から、あの恐ろしい原子爆弾がB29爆撃機「ボックスカー」によって投下されたのです。次に原爆投下中心地から徒歩で旧長崎医科大学や、山王神社へ向かいました。徒歩で向かうことでその施設がどれだけ原爆落下中心地から近いのかがよくわかりました。旧長崎医科大学では原爆投下前と原爆投下後の長崎を比べることができ、原爆の威力の強さが改めてよくわかりました。山王神社では被爆クスノキの中に石や瓦などが入っていて原子爆弾の爆風がどれほどのものだったのかがよくわかりました。長崎原爆資料館へ行きました。長崎原爆資料館は見学先調べでどんなところか、どんなものがあるかなどがある程度わかっていたのですが、いざ入ってみると、想像してた以上の原子爆弾に関する資料や展示物がありました。中でも印象に残っているのは実物大の原子爆弾の模型「ファットマン」です。ファットマンはプルトニウム型の爆弾で、その大きさは想像のはるか上を行きました。

3日目は平和公園で平和祈念式典に参加しました。式典開始後の悲しい雰囲気は忘れることはないでしょう。式典で山里小学校の児童が歌った、「あの子」という歌には「ああ あの子が生きていたならば」という歌詞が3回使われていて原爆で亡くなってしまった人に対する悲しみが表現されており、心に残りました。

僕は今回の長崎訪問を通して、原子爆弾の使用は2度と繰り返さないということをより多くの人に伝えていきたいです。また、2024年の現在、79年前の日本がまだ戦争をしていた頃から比べると、考えられないくらい平和で、安心して明日を迎えられるという幸せを

「当たり前」「普通」と考えずに生きていきたいです。

長崎を最後の被爆地に

成田高等学校附属中学校 2年 渡邊 あいり

なぜ広島と長崎に原子爆弾が落とされたのか、なぜ落とされなければならなかったのか…第二次世界大戦、日本は戦争をしていたという事実…これを忘れてはならないと思います。

1945年8月9日午前11時2分、長崎に原子爆弾であるファットマンが上空から約500mで炸裂しました。爆心地では、表面温度が3000度～4000度となり、秒速440mとなる爆風や熱線、身体と心を破壊する放射線が放出され、人々の生活と尊い命が一瞬にして奪われました。当時の長崎の人口約24万人中、死亡者73,884人、負傷者74,909人となります。そして今もなお、原爆症や原因不明の病に苦しみ続ける方がいらっしゃいます。

私は折り鶴平和使節団として、三日間長崎を訪問しました。そこで特に印象に残った場所が三カ所あります。

一つ目は救護所メモリアルです。ここでは、傷を負った人たちを救護した医者や看護師さんの証言、また当時の映像を見ることができました。思わず顔を背けたくなるような映像ばかりでした。証言パネルも、目を覆いたくなるような事実がたくさんありました。特に印象に残っているのは、吉沢マサ子さんの「皆を助けて下さいと祈りながら」の一部で「(人間を)まるで動物をころがしている感じであった。所々『殺して下さい』と叫び声も聞いた」という部分があります。とても痛かったのでしょうか…。「殺して下さい。」と叫ぶほど苦しかったのかと考えると、喉の奥がツンとしてきました。死んだ方がマシだということなのでしょう…。私はそれほどの苦しみを感じたことがないので、簡単に想像することができませんでした。しかし、79年前にこんなにも恐ろしい出来事が起きたのかと思うと、二度とこの悲劇を起こしてはいけないと強く思いました。

二つ目は山王神社です。原爆の爆風によって、半分が倒壊して約12.5度傾いてしまった鳥居や、被爆してボロボロになってしまったクスノキを写真で見ることができました。私は、鳥居に彫ってある名前が、熱線によって、石に含まれているガラスが膨張し、名前が見えなくなっていることに驚きました。当時長崎は、70年間草木は生えないと言われていたのですが、原爆投下から二年後に、クスノキは奇跡的に新芽が芽吹き、長崎の人々に生きる希望を与えたそうです。そして今も大きなクスノキは、根元に当時の痛ましい姿を残しつつも、元気に生きています。私はその生命力に感動を覚えました。

三つ目は平和祈念式典です。11時2分に黙祷をした時、79年前のこの時間、この瞬間、あの悲惨な出来事が起こったんだと思うと、今自分が生きている事、穏やかに暮らせていることに感謝しつつも、亡くなられた沢山の人の救う事ができなかった事に対して、無力さ

を感じました。

この三日間で私は、原爆の恐ろしさと平和の尊さを、目で見ても肌で感じる貴重な体験をすることができました。私一人の小さな力では、原爆を作るのをやめさせることはできません。今すぐ戦争を止めることはできません。でも、長崎で学び感じたことを、たくさんの人に伝えるということを実行していきたいと思います。それが今自分にできることであり、使命であると思います。

世界では、今この瞬間にも戦争があり、尊い命が奪われています。平和の輪が広まり、世界中の人々が穏やかに暮らせることを願います。

折り鶴平和使節団として参加することができて本当によかったです。

最後に、

平和をつくる人々よ！

一人ひとりには微力であっても、無力ではありません。

私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながりあえば、私たちは思い描く未来を実現することができる。長崎は、そう強く信じています。

私が胸を打たれた長崎市長の鈴木史郎さんの長崎平和宣言の一部です。私たちは一人ひとりが微力であっても、無力ではありません。長崎で感じた全てを伝え続けることで、平和な世界を実現することができる。私はそう強く信じています。



平和宣言

原爆を作る人々よ！
しばし手を休め 眼をとじ給え
昭和二十年八月九日！
あなた方が作った 原爆で
幾万の尊い生命が奪われ
家 財産が一瞬にして無に帰し
平和な家庭が破壊しつくされたのだ
残された者は
無から立ち上がらねばならぬ
血みどろな生活への苦しい道と
明日をも知れぬ”原子病”の不安と
そして肉親を失った無限の悲しみが
いついつまでも尾をひいて行く

これは23歳で被爆し、原爆症と闘いながらも原爆の悲惨さを訴えた長崎の詩人・福田須磨子さんが綴った詩です。

家族や友人を失った深い悲しみ、体に残された傷跡、長い年月を経ても細胞を蝕み続け、様々な病気を引き起こす放射線による影響、被爆者であるが故の差別や生活苦。原爆は被爆直後だけでなく、生涯にわたり被爆者を苦しめています。

それでも被爆者は、「世界中の誰にも、二度と同じ体験をさせない」との強い決意で、苦難とともに生き抜いた自らの体験を語り続けているのです。

被爆から79年。私たち人類は、「核兵器を使ってはならない」という人道上の規範を守り抜いてきました。しかし、実際に戦場で使うことを想定した核兵器の開発や配備が進むなど、核戦力の増強は加速しています。

ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えず、中東での武力紛争の拡大が懸念される中、これまで守られてきた重要な規範が失われるかもしれない。私たちはそんな危機的な事態に直面しているのです。

福田さんは詩の最後で、こう呼びかけました。

原爆を作る人々よ！
今こそ ためらうことなく
手の中にある一切を放棄するのだ
そこに初めて 真の平和が生まれ
人間は人間として蘇ることが出来るのだ

核保有国と核の傘の下にいる国の指導者の皆さん。核兵器が存在するが故に、人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶に向け大きく舵を切るべきです。そのためにも被爆地を訪問し、被爆者の痛みと思いを一人の人間

として、あなたの良心で受け止めてください。そしてどんなに陰しくても、軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。

唯一の戦争被爆国である日本の政府は、核兵器のない世界を真摯に追求する姿勢を示すべきです。そのためにも一日も早く、核兵器禁止条約に署名・批准することを求めます。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、北東アジア非核兵器地帯構想など、緊迫度を増すこの地域の緊張緩和と軍縮に向け、リーダーシップを発揮することを求めます。

さらには、平均年齢が85歳を超えた被爆者への援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

世界中の皆さん、私たちは、地球という大きな一つのまちに住む「地球市民」です。

想像してください。今、世界で起こっているような紛争が激化し、核戦争が勃発するとどうなるのでしょうか。人命はもちろんのこと、地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまいます。

だからこそ、核兵器廃絶は、国際社会が目指す持続可能な開発目標（SDGs）の前提ともいえる「人類が生き残るための絶対条件」なのです。

ここ長崎でも、核兵器のない世界に向けて、若い世代を中心とした長年の動きがさらに活発になっています。今年5月には、若者版ダボス会議と呼ばれる国際会議「ワン・ヤング・ワールド」の平和をテーマとした分科会が、初めて長崎で開催されました。

世界の若い世代が主役となって連帯し、行動する輪が各地で広がっています。それは、持続可能な平和な未来を築くための希望の光です。

平和をつくる人々よ！

一人ひとりには微力であっても、無力ではありません。

私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。長崎は、そう強く信じています。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げます。

長崎は、平和をつくる力になろうとする地球市民との連帯のもと、他者を尊重し、信頼を育み、話し合いで解決しようとする「平和の文化」を世界中に広めます。そして、長崎を最後の被爆地にするために、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてたゆむことなく行動し続けることをここに宣言します。

2024年（令和6年）8月9日
長崎市長 鈴木 史朗

○平和都市宣言

世界連邦平和都市宣言

(昭和 33 年 10 月 31 日宣言)

成田市は、宗教観光都市として、世界連邦建設の趣旨に賛同し、自ら永遠の平和都市となることを決意し、全世界の恒久平和確立と人類の福祉増進に努力せんとするものである。

右宣言する。

非核平和都市宣言

(平成 7 年 2 月 21 日宣言)

世界の恒久平和は、全世界の人々の共通の願いである。

我が国は世界で唯一の核被爆国として、広島・長崎に原爆が投下されて本年で 50 年目を迎える。

我々は、被爆者の苦しみを全世界の人々に訴え、再びこの地球上にあの惨禍を繰り返すことのないよう強く望むものである。

このため、平和を希求する我々成田市民は、我が国の国是である非核三原則が完全実施されることを願い、全世界の人々と共に、核兵器の廃絶、恒久平和確立のためここに「非核平和都市」を宣言する。



「平和と繁栄の像」

世界連邦平和都市宣言の記念として昭和 33 年の旧庁舎完成時に寄贈された。



「成田市平和のためのメンヒル」

平和を愛する成田市民の心の象徴として平成元年に建立された。

令和6年度 成田市中学生折り鶴平和使節団派遣事業
長崎訪問報告書

令和7年3月 発行

発 行 成田市

〒286-8585

成田市花崎町760番地

電 話 0476-22-1111 (大代表)

編 集 成田市シティプロモーション部文化国際課

登録番号 成文 24-041